

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	ニジェールにおけるクルアーン学校と社会秩序の維持に対する役割
氏名 Name	芦田 瑞歩
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ地域 研究専攻・1年
渡航国 Country	ニジェール共和国
渡航日程 Travel schedule	2022年 9月 16日 ～ 2022年 12月 3日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本研究の計画の目的は、西アフリカに位置するニジェール共和国（以下、ニジェール）の首都ニアメ市（図1）におけるクルアーン学校の現状について、生徒の人数や学習体系、子どもたちの日常生活を調査し、クルアーン学校がもっている社会における役割を明らかにすることである。ニアメ市では、クルアーン学校はハウサ語でマカランタと呼ばれており、この報告書ではクルアーン学校をマカランタと記すことにする。

ニジェールではフランス式の教育が採用されている一方で、95%以上の国民がムスリムであるため人々はクルアーンを暗唱し、イスラームの知識を修得することに努めている。クルアーンを理解することで、イスラーム共同体であるウンマの一員であることを自覚できるとされており、とくに女性はクルアーンを修得することで、個人として自立し、虐げられることなく生きる権利を得られる。人々はクルアーンを学び、イスラームの知識にのっとり生活することで、安定した社会を構築しようとしている。

ニジェールはユニセフの『世界子供白書2021』によると、人口増加率(2000-2020年)が3.6%、合計特殊出生数は6.7(2020年)と子どもの数が急激に増加している一方で、初等教育の修了率は2010年から2019年までの数値で男子は35%、女子は24%と低い。女子の中等教育の修了率は5%にも満たないのが実情である。

ユニセフの報告書によると、長らく、子どもをマカランタに預けることがムスリムとしての宗教実践の一部と捉えられており、子どもがクルアーンを修得し、イスラーム教師と良好な関係を結ぶことで家族の社会的地位も上昇するとされている。多くのマカランタは農村にあったが、1970年代、80年代の大干ばつや市場経済の浸透につれて、教師は都市へ移住し、一部の教師は子どもたちに物乞いをさせるようになった。社会の変化とともにマカランタの在り方も変化する一方で、初等教育の修了率が低いニジェールにおいては、マカランタが女子の教育へのアクセスを維持しているとも指摘されている。

今回の渡航は、9月16日から12月3日までの79日間であり、2022年現在のニアメ市のマカランタにおいて、学習環境やクルアーンの修得方法、子どもたちの生活を調査し、社会におけるマカランタの位置づけと子どもたちの生活や学習の実態を分析することで、マカランタが社会秩序の維持にどのように関与しているのかを解明することをめざす。そして、イスラームを学ぶマカランタの社会的な意義を明らかにしていきたい。

今回、わたしが調査を実施したのは、ニアメ市コミューンⅢのヌーボーマルシェ地区（図2）に位置するマカランタ X 校である。このマカランタ X 校において主に参与観察とインタビュー調査を実施した。参与観察では調査者自身が子どもたちと同様にマカランタの生徒となり、一緒に学ぶことを通してマカランタにおける教師と子どもたちの様子、授業形式・学習体系を記録した。そして教師と子どもへのインタビュー調査を通して教師自身のマカランタにおける授業、教師になるまでの過程、子どもたちの学習の様子を明らかにした。

成果 Outcome

調査は主に、マカランタ X 校における参与観察、インタビュー調査を実施した。子どもたちは7月から9月末まで小・中学校が休みで、マカランタ X 校は木・金曜日をのぞく週5日間にわたり開校しており、小・中学校がはじまった10月8日以降には土・日曜日の開校であった。マカランタ X 校には1人の男性教師 A 氏が2013年より授業を担当しており、この教師の使用言語はハウサ語であった。調査者は教師とのやり取りにはフランス語を用い、子どもたちとの会話はフランス語とハウサ語を併用した。

① 参与観察

参与観察によって調査者自身が子どもたちと同様に生徒となり、生徒の数やマカランタにおける授業形式、学習体系の調査・理解につとめた。以下、調査によって明らかになったことに関して、(1)生徒の人数や身なり、(2)授業形式・学習体系等に分けて記述する。

(1) 生徒の人数、身なり等

教師・子どもたちはともにマカランタ X 校には寄宿ではなく、家から通っている。教師はバイク、子どもたちは徒歩で通い、そのうち3組の姉弟については父または母が毎日送迎していた。生徒の出席人数は平均で、男女合わせて9月中の月曜日から金曜日までは44人、土・日曜日は22人であった。10月の平均人数は、土・日曜日を合わせた人数は33人であり、土曜のみは31人、日曜のみは36人であった。すべての調査実施日において、男子より女子のほうが多かった。また土曜日には、中学校に通っている生徒は学校があるためマカランタには来ないが、日曜日には中学生も登校が可能のため6~7人が増える結果となった。しかし、男女別にみると、日曜日に中学生以上の男子が登校したのは1人のみであり、基本的には土・日曜日ともに出席者は小学生とそれ以下の子どもであり、中学生以上の出席者は女子がほとんどであった。姉妹・姉弟で通っている子どもも多く、2~3歳ほどの子どもも多くいた。

身なりについてはとくに女子が特徴的であり、全員がヒジャブを身につけ頭髪を隠しており、髪の毛がヒジャブから出ている場合には、教師が注意することがある。また多くの女子はヒジャブの下にスカートを履いており、スカート丈が短い場合（とくに膝丈ほど）にも教師が注意することがあり、教師は女子に対してムスリムとしての振る舞いについて説いている。

(2) 授業形式・学習体系等

マカランタ X 校の内部は黒板の前に中央の柱を境に出席者が男女に分かれて座り、年齢の低い子は教師に近い前方にすわっている（写真1）。授業はおおよそ8時50分から9時すぎに開始し、10時50分から11時10分すぎに終了する。授業時間は、最長2時間30分である。以下の表が、マカランタ X 校における授業のおおよその流れである。

表1 マカランタ X 校におけるタイムスケジュール

時間	内容
9時06分	授業開始（暗唱開始）
9時35分	暗唱が中断し、子どもの独唱開始（挙手制）
9時40分	暗唱再開
10時18分	授業中断
10時20分	子どもの独唱（挙手制）
10時38分	アラビア語の授業開始
10時47分	子どもが黒板の前に立ち、授業のアラビア語を発言（挙手制）
10時55分	授業終了

（調査者作成）

授業開始から1時間10分ほど、男女が一緒にクルアーンを暗唱する。教師が先導し、子どもたちがその後続くように唱える。30分ほどが経過すると、出席者のうち幼少の子どもたちの集中が途切れはじめ、友達どうしでのおしゃべりをする子やあくびをする子が増えてくる。そのため、子どもどうしの話し声が大きく、暗唱の声が小さい場合、あるいは、発音が間違っている場合には教師が注意し、鞭を使って子どもたちを暗唱に向けさせることも多かった。その他にも食事をとる子どもや、座り方が乱れている子どもに対して鞭を使っていたこともあり、マカランタではイスラームの教を学ぶ以外に子どもたちのしつけの場所になっていた。

暗唱の際、クルアーンの一部が記されている本（写真2）を見ながら唱える子どももおり、このような本を持ってきている子どもの人数は男子が2人、女子が10人ほどであった。暗唱の途中で1～2回ほど、子どもたちが暗唱できているかを確認する時間があり、子どもたちに手を挙げさせ、教師は指名する。数人の子どもがひとりで暗唱し、完璧に暗唱できた子どもに対しては教師が授業の最後にお菓子を褒美として渡していた。挙手する子どもは毎回異なるが、必ず挙手して独唱に挑戦する子どもは決まっており、男子1人、女子3人の合計4人いた。

10月1日からアラビア語の授業がはじまり、アラビア文字を覚えることからはじまった。調査者も含めて生徒一人ずつが理解しているかを確認するために発音させることもある。およその出席者の人数は、男子が13人、女子が20人の合計33人であった。教師A氏は、アラビア語の授業時に黒板を用い、チョークでアラビア語を書いて、子どもたちはノートで黒板に書かれていることを書きとることが求められた。実際にノートをもっている子どもは平均して男子が1人、女子が8～9人であった。11月2日からアラビア文字の宿題が課されるようになり、専用のノートが支給された（写真3）。アラビア語の授業が進むにつれて、教科書（写真4）にしたがって授業がすすめられたが、教科書を持っている生徒は女子3人のみであり、それ以外の生徒は持っていなかった。授業で扱うアラビア文字を自由に読める生徒は男子が1人、女子が2人のみであったが、多くの子どもがクルアーンを唱えることができ、クルアーンを文字ではなく、音で覚えていることがわかる。

マカランタの授業出席に必要な授業料は、開校日数や生徒のそれぞれの出席日の多寡に関係なく、月の終わりに生徒一人あたり1000CFAフラン（200円）を支払うことが義務とされている。

② 教師と生徒へのインタビュー調査

11月の後半になり、教師A氏に対して半構造化インタビューを実施した。実施方法としては、教師がマカランタの授業後に別の仕事に就労していることから、調査者がノートに書いた質問に、筆記により回答してもらう形式をとった。子どもへの聞き取りはマカランタの授業が中断した時間に会話

の中で聞きとった。

教師 A 氏に対するインタビューでは、家族構成や使用可能な言語、マカランタ X 校の教師となった経緯、教師になるために必要なこと、マカランタでの学習歴、マカランタ X 校の歴史、子どもたちのマカランタへの平均通学年数、子どもたちがクルアーンを学ぶことに対する考えや思いなどに関して聞き取った。聞き取りから特徴的なこととして、教師自身が今もなおクルアーンを学び続けていること、そして教師の子ども時代と比較して近年のマカランタではノートを使用するなど、学習環境の近代化が進んでいることが分かった。そして教師はマカランタで子どもたちが学ぶことで、クルアーンを理解し、善良なムスリムを育てること、そして子どもたちが家族や地域の人に学んだことを伝えることで、さらなるイスラームの発展に寄与するという役割を強調している。ニジェール国民の 95% がムスリムであることから、マカランタの役割は非常に大きいことがわかる。

生徒に対しては、各自の年齢や家族構成などについて聞き取った。また、クルアーンが書かれている本に関しては、子どもたち自身のものではなく、父親や母親が使用していた本を受け継いで使用しつづけていることも分かった。わたしが授業に参加した 18 日間に休まず、毎回授業に参加した生徒は、男女ともに 1 人もいなかった。そのため、フランス語での会話が可能な小学生・中学生の生徒に休む理由を聞いたところ、家事の手伝い、また中学生は土曜日にも学校があることから疲れて朝早く起きられないことを挙げ、マカランタに通うことが強制的なものではなく、教師 A 氏も強く求めていることがわかる。

今後の展望 Prospects for the future

調査者がほかの子どもたちと同様に、生徒として授業に参加し、11 月後半にはインタビュー調査が実施できるようになった。今回はマカランタ X 校のみの 1 校における調査となったが、次回の渡航では、マカランタの教育方針や授業体系の違い、生徒の年齢による学習内容の違いを調査するために、時間帯を調整して子どもだけではなく成人（とくに女性）が通うマカランタなど、複数のマカランタで調査を実施する予定である。

今回調査を実施したマカランタ X 校は、ムスリムではない調査者を快く受け入れてくれたが、ほかのマカランタも同様とは限らないため、受け入れてくれるマカランタを探す予定である。また、マカランタ X 校では今回男女が分かれて座っており、男子生徒へのインタビューができず、女子生徒へのインタビュー調査も調査者自身のハウサ語の運用能力が乏しかったことから、フランス語が話せる子ども中心へのインタビューになった。語学能力を向上させ、マカランタの外での日常生活における子どもとのかかわり方を工夫し、次回の渡航では子どもたちの生活に関してのより詳細な調査を実施したい。



図1 ニジェール共和国の首都ニアメ市

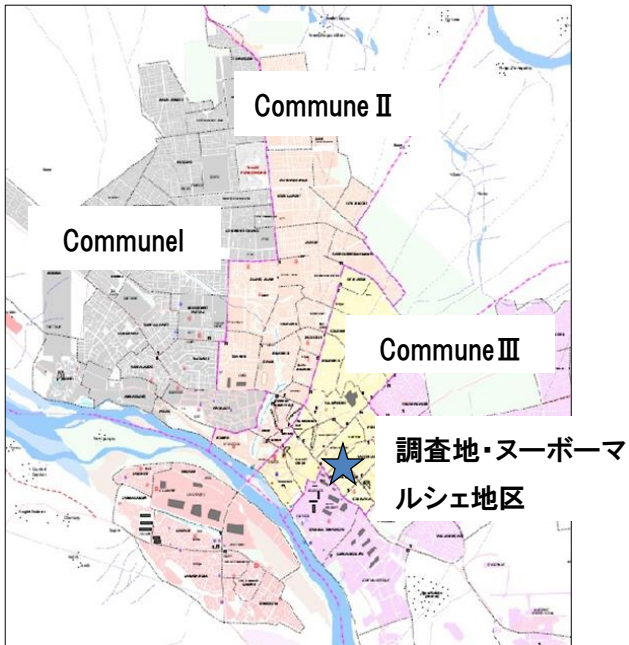


図2 調査地 ニューボーマルシェ地区



写真1 マカラントの教室内部：中央の柱を境に男女が分かれて座る。

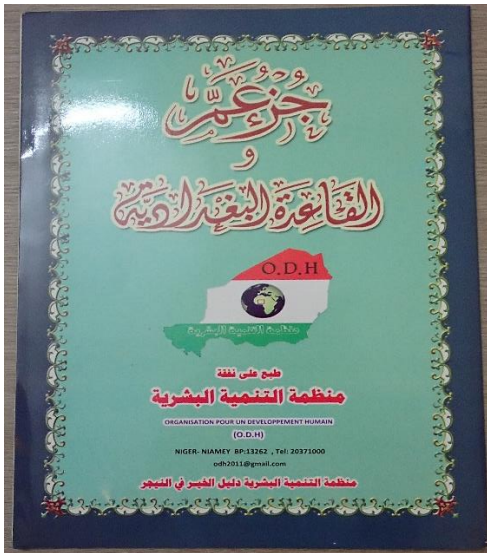


写真2 クルアーンの一部の章が書かれた本：アラビア語で書かれており、暗唱の際に読む子どももいる。

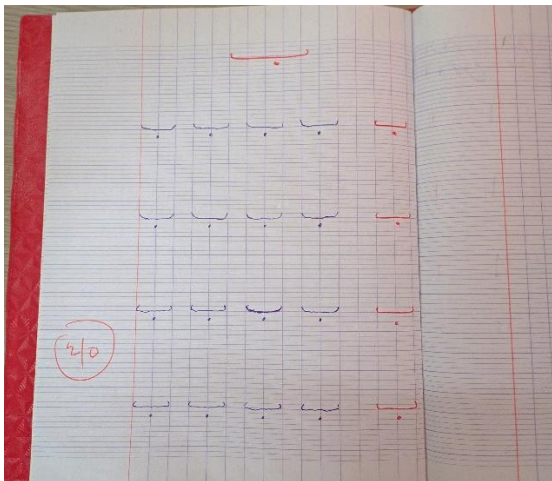


写真3 アラビア文字の練習課題：毎週一文字ずつ課される。

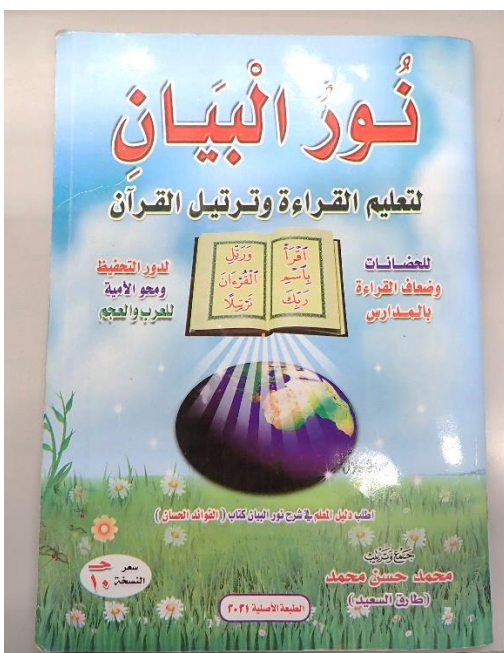


写真4 アラビア語の授業の際に使われた教科書：1回の授業で半ページ～1ページ分進む。